

# 2026年度 入学試験 **国語** 問題冊子

早稲田大学系属 早稲田渋谷シンガポール校

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かず、下記の注意事項をよく読んでください。

## 注 意 事 項

1. 問題は、本冊子のp. 1～p. 28となります。
2. 解答は、別紙の解答用紙に記入してください。
3. 「始め」の合図があるまで、問題冊子、解答用紙を開かないでください。
4. 監督者が「始め」の合図をしてから、問題冊子と解答用紙に、受験番号と氏名を記入してください。
5. 解答中に何か用事がある場合は、黙って手をあげてください。
6. 解答中に問題冊子や解答用紙の汚れ、印刷の不鮮明な箇所に気付いた場合は、黙って手をあげ監督者に申し出てください。
7. 「止め」の合図で筆記用具を置き、監督者の指示に従って解答用紙の回収を待ってください。
8. 問題冊子も回収します。持ち帰らないでください。
9. 文字は、明確に（丁寧に・十分な大きさと・濃く）記しなさい。  
字画（文字を構成する点や線）は、省略せずに楷書で記すこと。  
認識できない乱雑な文字は、不正解もしくは減点の対象となります。

受験番号						氏名





□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「わたしたちは、歲月の方をつかまえると、この瞬間を見失ってしまう。未来のために生きると、生きている現在を見失ってしまう」（『幸福の追求』社会思想社）。

このように述べ、現在が未来のための手段でしかなくなっていくことを憂えたのは、コミュニティ研究で知られる社会学者、マツキーヴァーであった。

確かに、現代社会では未来に目標を設定し、その目標を達成するために現在を効率的・合理的に生きることが求められる。より豊かな老後のために、より大きな企業への就職を目指し、より大きな企業への就職のために、より有名な学校への入学を目指す。まるで生まれたときから「未来のために生きる」ことを義務づけられているかのように。

しかし考えてみれば、私たちが体験できる時間は「現在」をおいてほかになく、「未来」を直接生きることができない。未来とは文字通り「未だ来ぬ」時間のことであり、本質的に不確実性をはらんでいる。その不確実な未来への関心が強まった結果、人々は常に不安のなかで生きることを余儀なくされているのではないだろうか。そしてその不安が大きくなるほどに、未来の不確実性に対応するための <sup>1</sup> 「現在の手段化」もますますエスカレートしてゆく。

精神科医の野間俊一が指摘しているように、「未だ結果が得られず不全形でしかない現在は、結果を得るための使い捨ての現在であり、そこにはやはり充実した時間の体験は存在しないことになる」（『身体の時間』筑摩書房）。このような状況に巻き込まれながら、人々は次第に「生きている実感」を希薄化させてきたのではないだろうか。

ここに見られるのは「未来による現在の支配」という構造であり、それは近代以降の資本主義社会が生みだした、歴史的に特殊な事態なのである。

個人を <sup>a</sup> キ調とする資本主義社会では、未来の不確実性への対応は、もっぱら「貨幣の獲得」というかたちで行われる。たとえば「老後の備え」といえば、それはたいがい「老後資金の準備」のことを意味している。共同体による支えが乏しい都

市部においてはなおさらである。

その貨幣の獲得にあたって最も一般的な手段となるのが、いわゆる賃労働だろう。私たちが当然のように受け入れているこの労働形態は、一面において人間を商品化させることにほかならない。資本主義経済では、資本家は人間の労働力を「労働力商品」として時間ぎめで購入し、それによって生産された生産物をより高く売ることによって利潤を得る。このとき労働者は、自らの「生きる時間＝生命」を商品として切り売りしている。その意味で資本主義経済は、人間の生命を商品化することによって成立しているということもできるだろう。マルクスにいわせれば、（資本主義的生産過程では）「時間がすべてであつて、人間はもはやなにもでもない、<sup>2</sup> 人間はただかたかた時間の残骸であるにすぎない」のである（「哲学の貧困」『マルクス＝エンゲルス全集』第四巻、大月書店）。ここでは人間は利潤獲得の「手段」として存在している。

ではこのような労働形態は、日本においてはどのようなようにして生まれてきたのだろうか。

幕末から明治初期に日本を訪れた外国人の文 <sup>b</sup> ケン<sup>||</sup>をまとめ、当時の日本の姿を浮き彫りにした渡辺京二によると、江戸期の日本では、時間を厳密に計測し切り売りするような賃労働は「いまだ知られざる観念」であつたという。「ひとは働かねばならぬときは自主的に働き、油を売りたいときはこれまた自主的に油を売った」のである（『逝きし世の面影』平凡社）。また、イギリスの初代駐日総領事を務めたオールコックは、次のような記述を残しているという。「まったく日本人は、一般に生活とか労働をたいへんのんきに考えているらしく、なにか珍しいものを見るためには、たちどころに大群衆が集まってくる」（『同前著』）。ここに描かれているのは、未来のためではない現在を、生き生きと生きる人々の姿である。

このような近代以前の社会では、それぞれの共同体ごとに「われわれ時間」ともいえるような多様な時間が存在していた。「われわれ時間」はその地域の営みとともにあり、その共同体で共有されている関心によって創造される。だから、それは「時計の時間」のような絶対的なものではなく、そこで生活する人々の暮らしや想いに配慮するかのよう <sup>c</sup> シン<sup>||</sup>縮する。そこでは「時間に追われる生活」などは本末転倒に感じられたはずである。たとえば、日本の伝統的な農村では、「話も十分にできないような田植方法は喜ばれなかった」という（宮本常一『忘れられた日本人』岩波書店）。

しかし明治以降、日本はいち早く欧米列強と対等な関係を結ぶため、「西洋の時間Ⅱ時計の時間」を導入する。これが一八七三（明治六）年の明治改暦である。次第に時間は均一化され、正確に計算できるものへとそのあり方を変えていった。これによって、人間の労働力を時間量として商品化するための基盤が成立する。この「労働力の商品化」こそ、社会の工業化、資本主義化を推進する前提となるものであった。

地域ごとの「われわれ時間」が身体化している人々を、均質な「労働力商品」に変えてゆくことは、当時の明治政府にとって大きな課題のひとつであった。その実現のためには、「時計の時間」に合わせて労働する意識と身体を、あまねく人々に身につけさせなければならない。その実践の舞台のひとつとなったのが、子どもたちの通う学校であった。

A

だが学校は、このような「地域の時間」から子どもたちを隔離し、大人と子ども、仕事と生活を分断した。このことは、子どもたちの「役割としての労働」を含めて成立してきた、地域の生活世界の破壊を意味していた。

やがて戦後の高度成長期を迎えると、賃労働は物質的な豊かさを実現する手段として能動的に受け入れられ、急速に一般化してゆく。大量の「労働力商品」を必要とする都市の工業化は、終身雇用制などによって安定した生活を保障し、人々に共同体からの離脱を促した。その前提に、近代的な学校教育の導入があったことは先述した通りである。

そしてこの賃労働の一般化は、人々の時間意識に大きな変化を生み出した。それは、共同体という共に生きる世界にあった「共有された時間」の<sup>d</sup>ソウ失であり、個人がそれぞれ「自分の時間」を所有しているという「時間の私的所有意識」の浸<sup>e</sup>トウである。

賃労働とは、個人の労働力を時間ぎめで切り売りするわけだから、個人がそれぞれ「自分の時間」を持っていることを前提としている。逆にいえば、「時間を個人が所有している」という意識が存在しなければ、「自分の時間」を切り売りすることもできない。こうしたことから、賃労働の成立と共同体の解体が不可分な関係にあったことがわかる。そのような賃労働が一般化することによって、「時間は個人のもの」という意識はさらに強化されていくことになった。

時間を私的に所有することは、近代社会においては個人の自由の獲得として肯定的にとらえられてきた。なぜならそれは、未来の時間の自己決定権を意味しているからである。

近代的な法制度において、所有権は「使用权・収益権・処分権」の束として保護されている。これに対応するかのようには、私たちは自分の時間を自分で使うことができるし（使用权）、対価を得ることを目的に他者に利用させてもよいし（収益権）、自由に処分してかまわない（処分権）ものとして認識している。

社会学者の立岩真也は、この近代的所有権のなかに、実は「自己決定権」が含まれていることを指摘する。先述したように、「所有権」はそれをどう扱うかという「決定権」でもあるから、その限りで私的所有（権）と自己決定（権）とは同じである（『私的所有論』勁草書房）。だとすれば、「私的に所有された時間」とは、すなわち「自己決定権を持つ時間」として存在しているということになる。

だが時間の私有を主張することは、必然的に「他者の時間」への干渉を控えることをも要求するだろう。やがて相互依存的な営みは失われ、貨幣への依存が中心となる。このような時間意識は、リスクをすべて自己の責任で処理することを求める。「市民社会＝資本主義社会」と強い親和性を持つ。その自由な時間は、個人として生きることを要求する社会の中で、さらなる「未来への不安」を生み出してゆく。その不安への対応が、現在という時間を「貨幣獲得の手段」としての賃労働へと導き、結果的に「労働力商品」の安定した供給を実現する。その意味で、資本主義社会は「不安をエネルギーとする社会」（野田正彰『都市人類の心のゆくえ』日本放送出版協会）として展開している。

「private property（私的所有）」が「私有財産」とも訳されるように、「時間の私的所有」とは「時間の私有財産化」のことでもある。その前提は「時計の時間」による時間の均一化である。時間が客観的なものとして均一化され、共通の基準を持つことによって、それは市場における貨幣との等価性を獲得し、交換可能なものとなる。このことによって、時間は「私有財産」としての価値を持つに至る。私たちが私有しているように感じているのは、あくまでそのような「交換可能な時間」なのである。この交換可能な時間を労働に投下することによって、労働者はその対価としての貨幣を獲得する。

このような交換可能な時間を生きる限り、私たち自身も交換可能なものとして存在せざるを得ない。

「私有された時間」を労働に費やしても、その労働を行うのは「交換可能な自分」である。未来の不安に対応するための賃労働が、現在における自分の存在意義を希薄化させてゆく。私有したはずの時間が、貨幣に置き換えられながら収奪されてゆく。<sup>3</sup> これが「時間の私的所有」のパラドックスである。

高度成長期以降の企業社会では、「就職＝自立」という価値観が支配的であり、そこで得た貨幣の力によって、他者に依存することなく生活できることが「自立」だとされてきた。だが<sup>4</sup> そのような自立観は、本当に妥当なものだったのだろうか。 そうした既存の考え方に対して、むしろ「自立とは依存先を増やすこと」だというのが、小児科医で脳性まひの障害をもつ熊谷晋一郎氏である。彼は東日本大震災のとき、建物のエレベーターが止まってしまったために、五階の研究室から逃げ遅れたという。

「そのとき、逃げるということを可能にする『依存先』が、自分には少なかつたことを知りました。（中略）他の人は階段やはしごで逃げられます。（中略）ところが私にはエレベーターしかなかった。これが障害の本質だと思うんです。つまり、『障害者』というのは、『依存先が限られてしまっている人たち』のこと。健常者は何にも頼らずに自立していて、障害者はいろいろなものに頼らないと生きていけない人だと勘違いされている。けれども真実は逆で、健常者はさまざまなものに依存できていて、障害者は限られたものにしか依存できていない」（インタビュー「自立は、依存先を増やすこと 希望は、絶望を分かち合うこと」『TOKYO 人権』第56号）

熊谷氏によれば、依存先が多様に確保されているとき、人はさも「何にも依存していない」かのように感じられる。つまりその状態こそが「自立」なのであり、それは決して何にも依存していないことではないという。

この考え方を通して、改めて現代の資本主義社会を見てみるとどうだろう。確かに私たちは、さまざまなものに依存しながら生きている。ところが実際には、その依存先の多くがいつの間にか「貨幣への依存」に置き換えられてしまっているのではないだろうか。もともと生活のなかにあった多様な相互依存的関係を、サービスとして商品化し、貨幣を介した関係に収斂

させてきたのである。

熊谷氏の文脈でいえば、資本主義とは「依存先が貨幣に限られてしまっている」という意味での「障害」を生み出す装置として存在しているのではないか。そうして本当の「自立」が困難となった結果、私たちは常に不安を抱えながら、<sup>5</sup> さらに貨幣への依存を強めてゆく。

(杉原学「存在感のある時間を求めて」による)

問一 二重線部 a 「キ(調)」・ b 「(文)ケン」・ c 「シン(縮)」・ d 「ソウ(失)」・ e 「(浸)トウ」について、同じ漢字を用いるものとして正しいものを、次の各群の A～E の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

a キ調

- A 敵の背後からキ襲をかける。
- I 災害地域に食料をキ付する。
- ウ キ願が成就することを願う。
- E キ本問題を確実に解く。
- オ 人工衛星がキ道に乗る。

b 文ケン

- A 製品の品質ケン査を行う。
- I 地域社会に貢ケンする。
- ウ ダムのケン設工事がある。
- E 特急列車の乗車ケンを購入する。
- オ 新入社員のケン修に参加する。

e

浸トウ

ア トウ明なガラスのコップ。  
 イ 選挙のトウ票に行く。  
 ウ 見解のトウ一を図る。  
 エ 好機がトウ来する。  
 オ 不況で会社がトウ産する。

d

ソウ失

ア 機械をソウ作する。  
 イ 書類を郵ソウする。  
 ウ 高校の同ソウ会に出席する。  
 エ ソウ心した表情を浮かべる。  
 オ 社会の階ソウ化が進む。

c

シン縮

ア シン鮮な野菜を食べる。  
 イ パスポートのシン請を行う。  
 ウ 手紙に追シンを書き添える。  
 エ シン重に行動する。  
 オ 慢シンは失敗につながる。

問二 空欄

A

の段落は、次のア～エの文から構成されるが、これらを最も適当な順序に並べ替え、記号で答えなさい。

ア その本質は教科の内容ではなく、時計の時間に管理された生活に子どもたちを慣れさせることにあったという。

イ 逆にいえば、明治初期までの子どもたちは、いまだ「時計の時間」に管理されてはいなかった。

ウ 寺子屋を廃して導入された、近代的な学校教育。

エ たとえば漁村などでは、授業中に「大漁！」の一報が入ると、子どもたちは筆を投げ机を蹴飛ばして、大人たちの仕事の手伝いに駆けつけたという。

問三 傍線部1 「『現在の手段化』もますますエスカレートしてゆく」とあるが、「現在の手段化」とはどのようなことか。

その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 未来の社会の発展に尽力できるよう、大きな企業で活躍できる人材になることを目指して、自己の研鑽けんさんに励むこと。  
イ 未来に幸福を見出せないと確信しているため、現在の人間関係や社会とのつながりに意味を感じられず、それらを疎かにすること。

ウ 未来の目標達成に心を奪われ、本当は現在を充実させることが目標達成につながるという事実を忘れること。

エ 未来においてより良い生活や地位を得るという目標のため、現在という時間を未来のための単なる過程と見なすこと。

オ 未来で発揮できる能力を見極めるため、現在において過剰なまでに自己の適性にこだわり、不安に悩まされること。

問四 傍線部2 「人間はたかだか時間の残骸であるにすぎない」とあるが、マルクスのこの言葉を通して、筆者はどのような

ことを述べているのか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 資本主義社会では、人間は時間を効率的に管理する能力によって評価され、その価値が定められてしまうこと。

イ 時間を商品化する労働により、人間は本来の価値を失い、商品価値を生み出すための手段に成り果てること。

ウ 資本主義社会では、精神の寛容さが乏しくなり、人間は相互に監視しながら時間に制約された生活を強いられること。

エ 時間は人間にとって最も貴重な商品であり、それを浪費する人間は、社会から不要な存在として取り残されること。

オ 人間は労働者として自らの時間を資本家に提供することで、資本家の富の構築の一端を担ってしまっていること。



問六 傍線部4「そのような自立観は、本当に妥当なものだったのだろうか」とあるが、「そのような自立観」に対して、筆者は「自立」をどのようなことだと考えているのか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 経済効率を追求し、貨幣に依存した社会の中であっても、独立して生活を維持できる能力を持つこと。
- イ 他者に対する依存関係を極力減らし、個人の自由と独立性を最大限に確保して生きること。
- ウ 社会の中で様々な人やモノ、制度などへ、状況に応じた頼り方ができる、多様な選択肢を持つこと。
- エ 困難を克服し、多くの健常者と同様に、何に対しても強く依存しない社会生活を営むことができること。
- オ 貨幣経済における商品化されたサービスから距離を置き、自然との共生の中で充実感を持って生きること。

問七 傍線部5「さらに貨幣への依存を強めてゆく」とあるが、筆者は「貨幣への依存」に関してどのような考えを持っているのか。その説明として**明らかに誤りを含むもの**を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 現在ではなく未来ばかりに目を向けることから生じる不安感が、人々の貨幣への依存を強化する要因となっている。
- イ 貨幣は時間を客観化し、相互の協働的な時間の使い方を可能にした反面、人々を忙しく駆り立てる社会を構築した。
- ウ 市民社会においては、本来多様であった人々の相互依存関係が、貨幣を介した関係へと一元化されていった。
- エ 貨幣への依存度が高い社会では、貨幣を得る主要な手段である「就職」が自立とみなされるといふ考え方が、正当化されやすい。

オ 近代的な学校教育の導入が、共同体的な支え合いが中心であった社会のあり方を、貨幣中心のあり方へと変容させる原動力となった。

□ 「私」は東京で作家として生活しているが、そこに至る道のりは困難に満ちたものであった。私生活でも多くのトラブルを経験し、故郷（青森県金木村）の実家とも縁が途絶えているが、呉服屋の「中畑さん」と洋服屋の「北さん」は、昔から変わらず「私」を見守ってくれていた。これに続く次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

三十歳のお正月に、私は現在の妻と結婚式を挙げたのであるが、その時にも、すべて中畑さんと北さんのお世話になってしまった。当時、私はほとんど無一文と行っていい状態であった。結納金は二十円、それも或る先輩からお借りしたものである。挙式の費用など、てんで、どこからも捻出の仕様が無かったのである。当時、私は甲府市に小さい家を借りて住んでいたのであるが、その結婚式の日には普段着のまま、東京のその先輩のお宅へ参上したのである。その先輩のお宅で嫁と逢って、そうして先輩から、おさかずきを頂戴して、嫁を連れて甲府へ帰るといふ手筈であった。北さん、中畑さんも、その日、私の親がわりとして立会って下さる事になっていた。私は朝早く甲府を出発して、昼頃、先輩のお宅へ到着した。私は本当に、普段着のまま、散髪もせず、袴もはいていなかった。着のみ着のままの状態だったし、懐中も無一文に近かった。先輩は書齋で静かにお仕事を居られた。（先輩というのは、実は〇〇先生なのだが、〇〇先生は、小説や随筆にお名前を出されるのを、かねがねとてもいやがって居られるので、わざと先輩という失礼な普通名詞を使用するのである。）先輩は、結婚式も何も忘れてしまっているような様子であった。原稿用紙を片づけながら、庭の樹木の事など私に説明して聞かせた。それから、ふつと気がついたように、

「着物が来ている。中畑さんから送って来たのだ。なんだか、いい着物らしいよ。」と言った。

<sup>(注1)</sup> 黒羽二重の紋服一かさね、それに袴と、それから別に絹の縞の着物が一かさね、少しも予期していないものだった。私は、呆然とした。ただその先輩から、結婚のしるしの盃をいただいて、そうして、そのまま嫁を連れて帰ろうと思っていたのだ。やがて、中畑さんと北さんが、笑いながらそろってやって来た。中畑さんは国民服<sup>(注2)</sup>、北さんはモーニング。

「はじめましょう、はじめましょう。」と中畑さんは気が早い。

その日の料理も、本式の会席膳(注3)で鯛なども附いていた。私は紋服を着せられた。記念の写真もうつした。

「修治さん、ちよつと。」中畑さんは私を隣室へ連れて行った。そこには、北さんもいた。

私を坐らせて、それからお二人も私の前にきちんと坐って、そろつてお辞儀をして、

「今日は、おめでとうございます。」と言った。それから中畑さんが、

「きょうの料理は、まずしい料理で失礼ですが、これは北さんと私とが、修治さんのために、まかしたものですから、安心してお受けなさつて下さい。私たちも、先代以来なみなみならぬお世話になって居りますから、こんな機会に少しでもお報いしたいと思つているのです。」と、真面目に言つた。

1 私は、忘れまいと思つた。

「中畑さんのお骨折りでです。」北さんは、いつでも功を中畑さんにゆずるのだ。「このたびの着物も袴も、中畑さんがあなたの御親戚をあちこち駆け廻つて、ほうぼうから寄附を集めて作つて下さつたのですよ。まあ、しっかりおやりなさい。」

その夜おそく、私は嫁を連れて新宿発の汽車で帰る事になったのだが、私はその時、洒落や冗談でなく、懷中に二円くらいしか持つていなかったのだ。お金というものは、無い時には、まるで無いものだ。まさかの時には私は、あの二十円の結納金の半分をかえしてもらつつもりでいた。十円あつたら、甲府までの切符は二枚買える。

先輩の家を出る時、私は北さんに、「結納金を半分、かえしてもらえねえかな。」と小声で言つた。「あてにしていたんだ。」

その時、北さんは実に怒つた。

「何をおっしゃる！ あなたは、それだから、いけない。なんて事を考えているんだ。あなたは、それだから、いけない。少しも、よくなつていないじゃないですか。そんな事を言うなんて、まるでだめじゃないですか。」そう言つて御自分の財布から、すらすらりと紙幣を抜き取り、そつと私に手渡した。

けれども新宿駅で私が切符を買おうとしたら、すでに嫁の姉夫婦が私たちの切符(二等の切符であつた)を買つてくれてい

たので、私にはお金が何も要らなくなった。

プラットホームで私は北さんにお金を返そうとしたら、北さんは、

「はなむけ、はなむけ。」と言って手を振った。綺麗なものだった。

結婚後、私にも、そんなに大きい間違いが無く、それから一年経って甲府の家を引きはらって、東京市外の三鷹町に、六畳、四畳半、三畳の家を借り、<sup>a</sup> 神妙に小説を書いて、二年後には女の子が生まれた。北さんも中畑さんもよろこんで、立派な産衣を持って来て下さった。

今は、北さんも中畑さんも、私に就いて、やや安心をしている様子で、以前のように、ちよいちよいおいでになって、あれこれ指図をなさるような事は無くなった。けれども、私自身は、以前と少しも変わらず、やっぱり苦しい、せっぱつまった一日を送り迎えているのであるから、北さん中畑さんが来なくなったのは、なんだか淋しいのである。来ていただきたいのである。今年の夏、北さんが雨の中を長靴はいて、ひよっこりおいでになった。

私は早速、三鷹の馴染のトンカツ屋に案内した。その女のひとが、私たちのテーブルに寄って来て、私の事を先生と呼んだので、私は北さんの手前もあり甚だ具合のわるい思いをした。<sup>2</sup> 北さんは、私の狼狽に気がつかない振りをして、女の

ひとに、

「太宰先生は、君たちに親切ですかね？」とニヤニヤ笑いながら尋ねるのである。女のひとは、まさかその人は私の昔からの監督者だとは知らないから、「ええ、たいへん親切よ」などと、いい加減のふざけた口をきくので私は、ハラハラした。その日、北さんは、一つの相談を持って来たのである。相談というよりは、命令といったほうがよいかも知れない。北さんと一緒に故郷の家を訪れてみないかというのである。私の故郷は、本州の北端、津軽平野のほぼ中央に在る。私は、すでに十年、故郷を見なかった。十年前に、或る事件を起して、それからは故郷に顔出しのできない立場になっていたのである。

(中略)

生家の玄関にはいる時には、私の胸は、さすがにわくわくした。中はひっそりしている。お寺の納所のような感じがした。部屋部屋が意外にも清潔に磨かれていた。もっと古ぼけていた筈なのに、小ぢんまりしている感じさえあった。悪い感じではなかった。

仏間に通された。中畑さんが仏壇の扉を一ぱいに押しひらいた。私は仏壇に向って坐って、お辞儀をした。それから、あによめ 嫂に挨拶した。上品な娘さんがお茶を持って来たので、私は兄の長女かと思つて笑いながらお辞儀をした。それは女中さんであつた。

背後にスツスツと足音が聞える。私は緊張した。母だ。母は、私からよほど離れて坐つた。私は、黙つてお辞儀をした。顔を挙げて見たら、母は涙を拭いていた。小さいお婆さんになっていた。

また背後に、スツスツと足音が聞える。一瞬、妙な、(もつたいない事だが、) 気味の悪さを感じた。眼の前にあらわれるまで、なんだかこわい。

「修ツちゃあ、よく来たナ。」祖母である。八十五歳だ。大きい声で言う。母よりも、はるかに元気だ。「逢いたいと思つていたね。ワレはなんにも言わねども、いちど逢いたいと思つていたね。」

陽気な人である。いまでも晩酌を欠かした事が無いという。

お膳が出た。

「飲みなさい。」英治さんは私にビールをついでくれた。

「うん。」私は飲んだ。

英治さんは、学校を卒業してから、ずっと金木町にいて、長兄の手助けをしていたのだ。そうして、数年前に分家したのである。英治さんは兄弟中で一ばん頑丈な体格をしていて、気象も豪傑ごうけつだという事になつていた筈なのに、十年振りで逢つてみると、実に優しい華奢きんしやな人であつた。東京で十年間、さまざまの人と争い、荒くれた汚い生活をして来た私に較べると、全然

別種の人のように上品だった。顔の線も細く、綺麗だった。多くの肉親の中で私ひとり、さもしい貧乏人根性の、下等な醜い男になってしまったのだと、はつきり思い知らされて、<sup>3</sup> 私はひそかに苦笑していた。

「便所は？」と私は聞いた。

英治さんは変な顔をした。

「なあんだ、」北さんは笑って、「ご自分の家へ来て、そんな事を聞くひとがありますか。」

私は立って、廊下へ出た。廊下の突き当りに、お客用のお便所がある事は私も知ってはいたのだが、長兄の留守に、勝手に家の中を知った振りしてのこのこ歩き廻るのは、よくない事だと思つたので、ちよつと英治さんに尋ねたのだが、英治さんは私を、きざな奴だと思つたかも知れない。私は手を洗つてからも、しばらくそこに立って窓から庭を眺めていた。一木一草も変つていない。私は家の内外を、もつともつと見て廻りたかつた。ひとめ見て置きたい所がたくさんたくさんあつたのだ。けれどもそれは、いかにも凶々しい事のようなだから、その小さい窓から庭を、<sup>b</sup> むさぼるように眺めるだけで我慢する事にした。

「池の水蓮は、今年はまだ、三十二も咲きましたよ。」祖母の大声は、便所まで聞える。「嘘でも何でも無い、三十二咲きましたてば。」祖母は先刻から水蓮の事ばかり言っている。

私たちは午後の四時頃、金木の家を引き上げ、自動車で五所川原に向つた。気まずい事の起らぬうちに早く引き上げましょう、と私は北さんと前もつて打ち合せをして置いたのである。さしたる失敗も無く、謂わば和氣藹々裡に、私たちはハイヤアに乗った。北さん、中畑さん、私、それから母。嫂や英治さんの優しいすすめに依つて母も、私たちと一緒に、五所川原まで行く事になったのである。行く先は叔母の家である。私はそこに一泊する事になっていた。北さんも、そこに一泊してそうして翌の日から私と二人で、浅虫温泉やら十和田湖などあちこち遊び廻ろうというのが、私たちの東京を立つ時からの計画であつたのだが、けさほど東京の北さんのお宅から金木の家へ具合の悪い電報が来ていて、それがために、どうしても今夜、青森発の急行で帰京しなければならなくなつてしまつたのである。北さんのお隣りの奥さんが死んだ、という電報であつたが、

北さんは、こりやいけない、あの家は非常に気の毒な家で、私がいけないとお葬式も出せない、すぐ行かなくちゃいけない、と言つて、一度言い出したら、もう何といつても聞きいれない、(注)頑固な大久保氏なのだから、私たちも無理に引きとめる事はしなかった。叔母の家で、みんな一緒に夕ごはんを食べて、それから五所川原駅まで北さんを送つて行つた。北さんはこれからまた汽車に乗つてどんなに疲れる事だろうと思つたら、私は、つらくてかなわなかつた。

その夜は叔母の家でおそくまで、母と叔母と私と三人、水入らずで、話をした。私は、妻が三鷹の家の小さい庭をたがやして、いろんな野菜をつくっているという事を笑いながら言つたら、それが、いたくお二人の気に入つたらしく、よくまあ、のう、よくまあ、と何度も二人でこつくりこつくり首肯うなずき合つていた。私も津軽弁が、やや自然に言えるようになっていたが、こみいった話になると、やつぱり東京の言葉を遣つた。母も叔母も、私がどんな商売をしているのか、よくわかつていない様子であつた。私は原稿料や印税の事など説明して聞かせたが、半分もわからなかつたらしく、本を作つて売る商売なら本屋じゃないか、ちがいますか、などという質問まで飛び出す始末なので、私は断念して、まあ、そんなものです、と答えて置いた。どれくらいの収入があるものですか、と母が聞くから、はいる時には五百円でも千円でもはいます、と朗らかに答えたが、母は落ちついて、それを幾人でわけるのでか、と言つたので、私はがっかりした。本屋を営んでいるものとはばかり思い込んでいるらしい。けれども、原稿料にしろ印税にしろ、自分ひとりの力で得たと思つてはいけないのだ、みんなの合作と思わなければならぬ、みんなでわけるのでこそ正しい態度かも知れぬ、と思つたりした。

母も叔母も、私の実力を一向にみとめてくれないので、私は、やや、あせり気味になつて、懐中から財布を取り出し、お二人の前のテーブルに十円紙幣を二枚ならべて載せて、

「受け取つて下さいよ。お寺参りのお賽銭さいせんか何かに使つて下さい。僕には、お金がたくさんあるんだ。僕が自分で働いて得たお金なんだから、受け取つて下さい。」と大いに恥ずかしかつたが、やけくそになつて言つた。

母と叔母は顔を見合せて、クスクス笑つていた。私は頑強にねばつて、とうとう二人にそのお金を受け取らせた。 4 母は、

その紙幣を母の大きい財布にいれて、そうしてその財布の中から熨斗袋おしとぶくろを取り出し、私に寄こした。あとでその熨斗袋の内容



問一 二重線部 a 「神妙に」・ b 「むさぼるように」の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

a  
神妙に

- ア 人知を超えた力に導かれるように  
イ おとなしい態度で真面目に  
ウ 生活のために必死に  
エ 世間からの評価を得られるように  
オ 儀式のように厳かに

b  
むさぼるように

- ア 懐かしむ気持ちに浸るように  
イ 少しでもご利益を受けられるように  
ウ 脳裏に深く刻みつけるように  
エ 飽きることなく一心不乱に  
オ がつつと情熱的に

問二 傍線部1「私は、忘れまいと思った」とあるが、この時の「私」の説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の置かれている厳しい経済状況に対して深く恥じる気持ちと、そのことで多大なる心配をかけてきた人々への謝罪の念を強く抱き、今後の結婚生活を通して、周囲の人々を安心させることを固く決心している。

イ 自分を支えてくれる人々から、予想だにできなかった立派な着物や会席料理の贈り物を受け取ったことで、強い感謝の念が心に押し寄せ、この思いを決して失うことなくいつかは恩情に報いようと決意を胸に刻んでいる。

ウ 無一文状態による自己嫌悪の念を抱きつつも、それゆえに支えてくれる人々が存在することに強い感動を覚え、今この瞬間の思いを作品として書き残しておこうという熱い創作意欲に駆られている。

エ 自分の配慮の無さゆえに、結婚式の準備には思いが及んでいなかったが、支えてくれる人々のお陰で用意された着物や会席料理を目の当たりにしたことで、儀礼やしきたりは重んじるべきだと考えを改めている。

オ 妻と結婚するという事実だけに気を奪われ、結婚式の着物や会席料理に必要な費用の算段のことは疎かにしていたが、いつの間にか費用を工面してくれた人々に対し、並々ならぬ感謝の念を抱いている。

問三 傍線部2 「北さんは、私の狼狽に気がつかない振りをして」とあるが、この時の「私」の説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 北さんと「私」の関係を知りながら、あえて「私」のことを「先生」と呼んだ店員の女性に対し、「私」の心を動揺させて楽しもうとする悪意を感じて、不信任を抱いている。

イ ようやく作家として認知され始めたとはいえ、店員の女性からの「先生」という言葉によって、「私」の日頃の態度が権威を笠に着たものだと北さんに露見してしまい、不本意に感じている。

ウ 店員の女性に「先生」と呼ばれるような立派な人間ではないと自覚しつつも、長年迷惑をかけてきた監督者の北さんの前では、少しでも見栄を張りたいという思いが勝っている。

エ 近頃の「私」の私生活における悪行について、北さんが興味本位で「先生」と呼んだ店員の女性に詳しく尋ねるかもしれないという不安を感じ、二人の会話を早急に終わらせようと焦っている。

オ 過去の「私」の過ちを知る監督者である北さんの目の前で、店員の女性が「私」のことを「先生」と必要以上に持ち上げて呼んだことによる体裁の悪さを感じている。

問四 傍線部 3 「私はひそかに苦笑していた」とあるが、この時の「私」についての説明となるように、次の空欄  X

Y に適当な語句を補って、【説明】を完成させなさい。

【条件】

X 〓 十字以内（句読点等を含む）の言葉で補うこと。

Y 〓 三字以内（句読点等を含む）の言葉で補うこと。

【説明】

「私」は故郷の家族の  X 様子に触れ、それと対照的な自分自身に苦々しさを覚えた。これは、自分と家族を比較するという、 Y な視点に立っている、と見ることができる。

〈下書き用〉

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

問五 傍線部4「母は、その紙幣を母の大きい財布に入れて、そうしてその財布の中から熨斗袋を取り出し、私に寄こした」

とあるが、この時の「母」の説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 息子が差し出した紙幣を、勢いに気圧されて一旦は受け取ったが、息子と家族との金銭的なもつれが起こらないよう、今後は実家への金銭的支援は一切必要ないという意味を、手渡した熨斗袋に込めている。

イ 親として息子の努力を認めるために、息子の申し出を形式的には受け入れつつも、自らの実力を過信している息子への戒めとして、より大きな金額の紙幣を入れた熨斗袋を手渡している。

ウ 息子が苦勞して得た紙幣をやけになって差し出した様子を見て、息子の仕事の真の意味は理解できないながらも、その思いを受け止めたことを形に表し、同時に息子への励ましの気持ちを熨斗袋で示している。

エ 経済的自立への喜びから、息子の差し出す紙幣を受け入れたが、社会的成功がようやく取り戻した家族の精神的つながりを断ち切り、再び家族を軽視する傲慢さに繋がらないようにという思いを熨斗袋に込めている。

オ 息子と家族との間の心理的な隔たりを埋めるため、息子の差し出した少額の紙幣に対してわざと大げさに感謝を伝えながら受け取り、さらに息子の仕事の価値を理解した証として、熨斗袋で祝意を示している。

問六 傍線部 5 「そうして私ひとり、相も変わらず、のほほん顔」とあるが、この時の「私」の説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自身の過去の所業が、北さんを始めとした周囲の人々の人生に暗い影を落としていることを自覚し、その責を一身に背負おうとするあまり、贖罪の念に苛まれ、もはや平静を装うことすらできなくなっている。

イ 北さんを始め、支えてくれる人々のおかげで実現した家族との再会を通じ、長年深く心に刻まれていた罪悪感が薄れ始めていることを自覚し、過去の呪縛から解き放たれた解放感に身を委ねている。

ウ 過去の悪行に対する後悔の念と、現在の平穏な生活への安堵感が複雑に絡み合い、自己嫌悪と自己肯定の間で揺れ動いている中、北さんを始め、周囲にはその安堵感を悟られまいと、努めて感情の起伏を抑えている。

エ 北さんを始め、自分のために骨を折ってくれる人々への深い罪悪感が内心に渦巻く一方で、多少は成長したつもりでも根本的には変わらない自分の無力さを肯定せざるを得ず、自嘲的な態度を取っている。

オ 自身の行動が、北さんを始めとした周囲に与えた影響の大きさを痛感し、その責任の重さに押しつぶされそうになりつつも、今さら後悔しても過去は戻らないという諦念もあり、深く考えることを避けている。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

むかし奈良の帝の御時、小野美佐吾といふ人、武蔵守になりてこの国へ下りたまひしに、ここにさねかづらといひてたぐひなき美女ありしを、美佐吾思ひそめとり迎へてより、片時も離るることなし。月日経て、帝よりの召しによりて奈良の都へ上り、若草山の麓に住みたまひしが、さねかづらがことを忘れかね、1 日にまし思ひ深くなりて、死ぬべき時になり、「我死なば武蔵国へ体を下して、さねかづらが住みし辺りに葬るべし」といひおきて、つひにむなしくなりたまふ。しかれども遠き国のことなれば、下すこと 2 叶ひがたく、若草山の麓に納めて、X 野と名付けるとなり。

さねかづらも 3 美佐吾のことを明け暮れ恋ひ悲しみ、「今ひとたび会はせたまはれ」と、神に祈りをかけたりしに、正しき夢の告にまかせ、この坂へ来たりて美佐吾を待ちたりしに、見しに変はらぬ姿にて、夢ともなく現ともなく、しばらく相語らひ消え失せぬ。それより 4 この坂をあふ坂と名付けるとぞ。

(『紫の一本』による)

- (注) 1 武蔵守——武蔵国 (今の東京都・埼玉県・神奈川県の一部地域) を治めた行政官の長。
- 2 下り——「下る」は、都から地方に行くこと。地方から都に行くことは「上る」。

問一 二重線部「たまひしに」を、現代仮名遣いに改めなさい。

問二 傍線部1「日にまし思ひ深くなり」とあるが、「小野美佐吾」がこのようになるまでの経緯の説明として、最も適当なもの、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 赴任先の武蔵国で美しい女性と結婚し、仲むつまじく暮らしていたところ、帝の命令で奈良の都へ戻らなければならなくなったことで、武蔵国に残してきた妻に会いたいという思いが増していった。

イ 武蔵国に赴任した際、手厚い歓待をしてくれた美しい女性に一目惚れし、結婚を申し込んだものの、あっけなく断られてしまったことで、どうしても結婚したいという思いに駆られていった。

ウ 奈良の都で美しい女性と結婚し、共に武蔵国へと移り住んで静かに暮らしていたが、都での華やかな暮らしが忘れられず、もう一度奈良の都に戻りたいという思いが強くなっていった。

エ 武蔵国に赴任し、美しい女性と結婚し、幸せに暮らしていたが、妻の美貌のうわさを聞きつけた帝の命令により、妻が奈良の都へと連れて行かれたことで、妻を連れ戻したいと思うようになっていった。

オ 立身出世を目指してやって来た武蔵国で、美しい女性と出会い、二人で若草山の麓で暮らしていたが、その女性が急に亡くなってしまったため、もう一度会いたいという思いが大きくなっていった。

問三 傍線部 2 「叶ひがたく」について、次の問いに答えなさい。

- (1) 美佐吾はどのようなことを願っていたのか。そのことを指す内容を、次の空欄に当てはまるように二十八字（句読点等を含む）で抜き出し、最初の三字を答えなさい。

二十八字  
こと。

- (2) (1)を踏まえて、本文中の空欄  に当てはまる言葉として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 奈良    イ 月日    ウ 武蔵    エ 若草    オ 夢

問四 傍線部 3 「美佐吾のこと」の説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 奈良の都から武蔵国に向かう途中で妻と生き別れになったということ。  
イ 離れて暮らす妻との再会が叶わないのを悔やんでいるうちに時が過ぎ去ったということ。  
ウ 奈良の都で亡くなった妻の後を追って、自ら命を絶ったということ。  
エ 妻と再会できずに死んだ時のことを思っで遺言を残し、やがて亡くなったということ。  
オ 片方が死んだときはもう片方が相手を葬ると、妻と約束を交わした後息絶えたということ。

問五 傍線部4「この坂をあふ坂と名付けるとぞ」とあるが、「あふ坂」という名前の由来の説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 武蔵守であつた「小野美佐吾」が、運命的な出会いを果たした「さねかづら」と、仲むつまじく暮らした場所だったことによる。

イ 「小野美佐吾」に会いたいと願った妻の「さねかづら」が、夢で聞いた神のお告げに従い出会った場所だったことによる。

ウ 奈良の都へと旅立った「小野美佐吾」が、妻の「さねかづら」の夢の中に現れ、再会を約束した場所だったことによる。

エ 不遇の死を遂げた「小野美佐吾」を妻の「さねかづら」が丁重に葬り、夢の中でつかの間の再会の後にも夫の死を弔い続けた場所だったことによる。

オ 長年「小野美佐吾」の居場所を訪ねて旅をしていた妻の「さねかづら」が、ついに夫と再会できた場所だったことによる。

問題は以上です。

